

『資本論』とドイツ修正主義論争

— 『資本論』の読まれ方 —

小幡道昭

2017年2月18日

目次：

『資本論』と社会主義/ブルードン批判/ラッサール主義/ドイツ修正主義論争
マルクス＝レーニン主義/宇野弘蔵の『経済学方法論』

■はじめに 今回テーマにいただいた「マルクス主義・社会主義・社会民主主義 — 『資本論』とドイツ修正主義論争 —」について考えたことを、わかる範囲で話したいと思います。ただ「マルクス主義・社会主義・社会民主主義」という主題については、はなはだ不十分ですが、別の機会に話したことでご勘弁いただき、ここでは、副題の「『資本論』とドイツ修正主義論争」について話してみます。とはいっても、この副題とて私はずぶの素人、おもしろい話のできるわけもなく、窮余の一策、私の知っている『資本論』のサイドから、それとの関わりでいくつかの社会主義を歴史的に眺めてみるのも一興かと思ったばかり、考えてみると、『資本論』は著者の意図を離れ、その後のマルクス主義者によって、いろいろに「読まれた」わけです。もちろん、著者は「読ませ方」を工夫するのですが、読み手は独自の「読み方」をします。こうしてさまざまな「読まれ方」が生じるのであり、この推移をたどることで、歴史的存在としての「マルクス主義」を明らかにできます。こうした「読まれ方」に対する反省ぬぎに、ただ『資本論』を読んでも、社会主義やマルクス主義について語ることはできない、これが私の「読み方」です。

■『資本論』と社会主義 なんだか、宇野弘蔵の本のタイトルみたいな小見出ですが、そういうことではなく、文字通り、『資本論』と社会主義の関係をどう考えたらよいか、というだけのことなのですが、この点について、はじめに二つほど、注意しておきたいと思います。

一つ目は、ご存じのとおり、こうした観点からみると、『資本論』には直接、社会主義ないし共産主義について正面から論じた記述がはなはだ乏しいという点です。^{*1} それはもっぱら、資本主義の分析に集中したものです。資本主義の矛盾とか、それが現実に生み出す

^{*1}第一巻にかざれば、「社会主義」という用語はブルードン批判の文脈で相手を小ブルジョア社会主義と揶揄するかたちで用いられ、共産主義という用語も一言、第2版で「それゆえ、共産主義社会では、機械は、ブルジョア社会とはまったく異なった活動範囲をもつであろう。」という一文が註として追加されただけです。K.I., S.416 (26a)

悲惨な状況とか、あるいはその究極に行きつくであろうすがたについては克明に論じられていますが、では、その悲惨な状況をどう乗り越え、次に来るべき社会をいかに構想するのか、ということ論じることは禁忌されています。これは、現実の資本主義の歴史的発展をふまえることなく、人間の「本性」に関する一般的な「理念」から「あるべき社会」をデザインする、当時の「社会主義」を方法論的に批判した結果です。この点で、一般的「理念」が実は「上部構造」にすぎず、歴史的に変転する、見えない「下部構造」に規定されて移り変わるのだとする「唯物史観」こそ、19世紀の「啓蒙主義」を乗り越える画期的な契機だと繰り返しいわれてきたわけですが、ただ、難しいのはこの先です。「唯物史観」に基づく「イデオロギー」論は、既存のエスタブリッシュメントを「批判」するときにはきわめて強力にはたらきますが、自ら積極的な提言をする段になると屈折せざるをえません。「唯物史観」を基礎にした資本主義分析の書である『資本論』に、社会主義に対する直接的構想は読みだすことは困難であり、いわんや具体的な政策提案などできません。とはいえ、『資本論』が「社会主義」に対して無関係なのか、というところももちろんそんなことはありません。むしろ、現存の資本主義に対する単なる分析ではなく、当時の「社会主義」に対する「批判」こそが、理論展開を影で引っ張る動力になっています。この点を隠れた動力を読みだしてみようというのがここでのポイントです。

もう一つは、このような『資本論』の展開動力を考えると、とりわけ『資本論』を三巻本の体系としてみるか、あるいは一巻でひとまず完結した小体系でみるか、注意する必要があります。マルクスの「プラン」では、さらに現行の三巻体系の枠組をこえたもっと大きな構想があったことはよく知られています。しかし、こと、当時の「社会主義」批判という観点からみると、一巻で閉じた小体系を基本に考えるほうが問題ははっきりします。これは私個人の観点からいうのではなく、『資本論』が刊行され、実際に受容されていた当時の客観的状況をからみてこう考えるべきなのです。

■ブルードン批判 こうして第一巻を中心に見てみると、そこで強く念頭におかれている一方の旗頭が、ブルードンであり、もう少し見えずらい他方の旗頭がラッサールです。本来なら詳細にテキストにあたって説明すべきところですが、愚昧冗漫な読書歴をひとまず信じていただくこととして、大筋だけ述べますと次のようになります。第一巻を前半後半に二分するとすると、前半はブルードンの「搾取なき市場」論批判が基盤になっています。現実の市場が不完全だから、資本は利潤を得ることができるのであり、もし、金属貨幣の「専制」を廃し自由な競争で等価交換のルールを貫徹させることができれば、市場をベースにした社会編成ができる、国家なき市場経済社会が実現できる、こうした無政府主義^{アナーキズム}が批判の焦点です。このために『資本論』では、入念に商品価値を規定することからはじめ、一般商品と全く同様に労働力商品の価値を規定すると、その結果として資本のもとに必然的に剰余価値が形成されることを論証してみせるわけです。労働者に対する「搾取」は、市場のルールの侵犯ではなく貫徹の結果だ、これが結論です。したがって、市場を残しながら「搾取」を廃棄しようというのは、どだい無理な相談だ、ということになります。マルクスが『資本論』のフランス訳に力を入れたのもおそらくブルードン批判に関係しま

す。^{*2}

しかし、このプルードン批判には、深刻な副作用があります。一つは「社会主義＝市場廃絶」論です。20世紀の計画経済型社会主義が瓦解するまで、社会主義といえば、どうやって市場を廃絶するか、が問題だったのです。いまになってみれば、『資本論』だって積極的に「計画経済」と明言しているわけではない、実は自由な労働者のアソシエーションがマルクスの真意だ、という弁明はやってできないことではないでしょうが、この種の「<実は>論」に、私自身はあまり関心はありません。それよりも、マルクスがプルードンを相手に展開した議論が—『資本論』の「誤解」であろうとなかろうと—歴史的状況のなかでソ連型社会主義に骨化したことは紛うことなき「事実」です。「誤解」にも、それを生みだす、それなりの歴史的必然性はあるのです。

もう一つは、この反面になるかもしれませんが、国家の問題です。「マルクスが市場廃絶といっている、いない」の解釈はさておき、この論法でゆけば、市場が変わって、社会的再生産を編成する別の方式が問題になります。すでにのべたように、マルクスはプルードンと同じ次元で、代替案を提示するようなことはしません。唯物史観は、よくいえば自己懐疑ですが、単純明解な対案提起を困難にし、結果的には大きな「空欄」を残してしまいます。「市場社会主義」に没落してゆく小ブルジョアジーのイデオロギーだというラベルを貼ることはできますが、ではこれに市場に代えて、何によって、どのように経済社会を編成するのか、実践可能な方策は理論からはでてこないのです。

もう一度『資本論』を第一巻で完結したものとして読んでみると、その前半体系で等価交換のルールに基づいて資本のもとに剰余価値が形成されることが明らかにされます。市場をベースとする資本主義では搾取は必然なのですが、理論的に証明されたからといって、労働者を啓蒙すれば資本主義を否定する運動が生まれるわけではありません。搾取は不正だというのも、やはりイデオロギーにすぎないことになります。「労働日」や「機械と大工業」などの章を読むと、当時の悲惨な状況が克明にレポートされています。それは前半体系の前半における形式的な搾取論（プルードン批判）をこえた次元の収奪の実態なのですが、どんなにその悲惨な状況を描いても、だからそれを改善すべきだという方向に議論は進みません。それは資本主義の必然なので、直接的な応急措置では根本問題は解決し

^{*2}第一巻についてみると① S.81 註(24). 何でもすぐに売れるという「俗物的ユートピア」の市場像が「プルードンの社会主義」、それは「ずっと昔にグレイ、ブレイ、その他の」リカードは社会主義者がいっていたことだ。② S.100 (28) プルードンは「理想」Ideal によって正義を語る。これによって「商品生産の形態」つまり市場の原理が理念的に「正義」Gerechtigkeit と等置される。要するにイデオロギー問題であり、これに対して超越的な「正義」を歴史的存在として相対化する唯物史観を対置するのがマルクス。③ S.109 (50). グレイに対しては、そしておそらくこの背後にプルードンも重ねて、オウエンをもちだして批判する。「労働証券」が劇場の切符と同じで「貨幣」でないことはオウエンも弁えていた。商品生産を前提にして「貨幣の小細工」Geldpfuschereien で問題を解決できると考えるのは貨幣の本質を理解しない証拠だ。等々が、価値論ベースで直接市場社会主義に向けられた批判。そのほか、④ S.445 (185) 分業の延長線上に機械を位置づけるプルードンを批判。機械は労働手段の総合であり人間労働を排除するというのがマルクス。⑤ S.538 (8) 剰余労働を「市民の権利」「義務」として人間労働の本質に関わらしめるプルードンを批判。「自然の恵み」は本来「多くの暇な時間」をもたらすというマルクスの社会主義＝自由時間論が背景にある。⑥ S.613 (14) 賃労働は商品生産を不純にする、小生産者的な商品経済を理想化するプルードンを批判。自己労働に基づく所有が他人労働に基づく他人労働の領有に転化すると領有法則の転回論の狙いはプルードン批判。以上はかなり私の独断的読み込みによるパラフレーズです。時間があればもっと丁寧に解釈いたしますが、こういう場なので乱筆乱文御寛容ください。

ないのだと読者に悟らせる客観的ルポルタージュです。この唯物史観に立脚した客観主義が、現実の困難のもとでさまざまなかたちで自然発生する改良運動、抵抗運動に対して、20世紀のマルクス＝レーニン主義がとってきた基本姿勢を、統一戦線とか二段階革命とか、さまざまなその表情を、根底で規定してきたのです。

唯物史観の副作用は後半体系に及びます。倫理的な資本主義批判を徹底的に回避したからといって、資本主義が永遠に続くというわけではありません。「蓄積せよ蓄積せよ、これがモーゼだ」というかたちで、剰余価値は蓄積され、資本の「人格化」たる資本家は、その歴史的使命を果たす。その結果、資本構成の高度化の蓄積が不断に続き、資本主義のもとで生産力の増進が極限まで進む。しかし、この機械化の進展は、資本の集中と過剰人口の累積を生みだしてゆく。資本主義はここにおいて、その歴史的使命を終えて、自ら崩壊する。非常にラフですが、私の見るかぎり、これが『資本論』第一巻の結論です。

もう少し『資本論』に即していうとこの最後の結論は、「生産手段の集中と労働の社会化とは、それらの資本主義的な外観と調和しえなくなる一点に到達する。この外皮は粉砕される。資本主義的私有の吊鐘が鳴る Die Stunde des kapitalistischen Privateigentums schlägt. 収奪者が収奪される。」(S.791)なのですが、この「労働の社会化」die Vergesellschaftung der Arbeit が具体的に何を意味するのか、またこの後にでてくる所有全般を廃棄するのではなく「個人的所有を再建する」Diese stellt nicht das Privateigentum wieder her, wohl aber das individuelle Eigentum auf Grundlage der Errungenschaft der kapitalistischen Ära: der Kooperation und des Gemeinbesitzes der Erde und der durch die Arbeit selbst produzierten Produktionsmittel. とはどのようなことなのか、これは解釈だけですむ話ではありません。おそらく、唯物史観はこうした「空欄」を残すかたちになるのであり、バルンシュタインが考えた「弁証法」一般が改良主義の障害になったのではありません。バルンシュタインやカウツキーも、だいたい第一巻の事実上結語にあたる第7篇第24章「いわゆる本源的蓄積」の第7節「資本的蓄積の歴史的傾向」の部分を下敷きに、マルクス派の「エアフルト綱領」を書きあげたといわれています。しかし、それには一種の穴埋め問題を解く必要があったのです。

■ラッサール主義 この穴埋め問題を解決に強い影響をおよぼしたが、ラッサールです。『資本論』はドイツ語で執筆刊行されたわけで、第一の読者層に想定されたのはドイツの社会主義者でした。ラッサールは、このドイツの社会主義者に理論的にも実践的にも先行して強い影響力をもっていました。プルドン(1809年 - 1865年)がマルクス(1818年 - 1883年)よりちょっと年上のフランス人だったのに対して、ラッサール(1825年 - 1864年)はマルクスよりちょっと若いドイツ人ですが、マルクスと違ってずっとプロイセンにとどまり現実の運動指導者として、ドイツの社会主義運動に強い影響をおよぼしていました。二人の関係はかなり複雑で屈折したようです。こうした当たりの話に好奇心を示すことを恥じる妙なイデオロギーが私には染みついています、で何も知らないのですが、ラッサール批判を背景に『資本論』を読むとわかることがいくつかありますが、ラッサール批

判のポイントはおそらく二つです。^{*3}いずれも『資本論』の表面にはでてきませんが、一つは「国家」、もう一つは「改良」の問題です。本題のドイツ修正主義論争になかなかとりつかないのですが、修正主義論争の下地はラッサール批判の再版みたいなのところがあるのでご辛抱ください。

いま述べたブルードン批判のラインで将来の社会を考えると、大枠においてラッサールに限りなく接近する^{*4} わけで、逆にそれとの違いをどうしても読者に「悟らせる」必要があるわけです。『資本論』には独自の「読ませ方」が隠されています。残念ながら、ラッサール主義とはなにか、ここで詳しく説明する能力は私にありませんが、その基本は、一般にいわれているように、社会主義と国家の連結でしょう。ブルードンの市場社会主義批判で空欄にされた部分を埋める可能性は、— 「共同体」主義 communitarianism といったタームでばかさず、恥も外聞もなく素直にいつてしまえば — 国家 state か 協同組合 association か、どちらかです。たしかに国家か協同組合かということになると、集権化か、分権化かで鋭く対立するのですが、反市場というかぎりでは同じラインに並びます。

ラッサールは社会主義運動を実際に指導する立場にあり、その主張もプラクティカルに揺れますが、1863年の「全ドイツ労働者同盟」の設立のための『労働者綱領』*Arbeiterprogramm* 1862などで提唱された方向はおおむね次のようなものです。ラッサールというと、巷間では「国家社会主義」の先駆のようにいわれていますが（私も漠然とこう決め込んできましたが）、その国家は、テクノラートが支配しトップダウンで計画を立て遂行する中央集権的な国家ではありません。考えられていたのは、普通選挙を通じて労働者の政治と経済への参加の道を拓くルートとしての国家です。普通選挙は、この時期ドイツでは焦眉の課題で、これを求める自由主義者の進歩党と連携してビスマルクにぶつかるとか、あるいは独自にそれを追求するとか、この選択が迫られており、ラッサールはけっきょく後者の道を選んだようです。要するに、ブルジョアジーと結んで民主革命をやり、それからプロレタリア革命をという二段階革命のような迂回路を経ず、直接独自の社会主義へ進もうとしたわけで、その際、ラッサールからみれば、利用できる範囲で、頼りにならないブルジョアジーと組む代わりに、ビスマルクを利用するということだったのかもしれない。

ただ、ラッサールのこうした政治方針は、同時に資本主義の漸進的改良は不可能であると説く、賃金鉄則に代表される経済学と結びついていました。リカードの人口法則によるにせよ、J.S. ミルの賃金基金説によるにせよ、労働組合や消費組合で分散的に改善を達成しても、それは価格上昇で帳消しになるというのです。その点でラッサールは、消費組合の効果は否定しますが、独自の生産組合を提唱します。このかたちで労働者が企業経営に

^{*3}手元に本がないので、もっぱら次の本からの知識によるものです。パートランド・ラッセル『ドイツ社会主義』1990年、みすず書房。ラッセルはフェビアン協会の観点から当時のドイツ社会主義をイギリス人に紹介しており、逆にフェビアン協会が代表する当時の「イギリス社会主義」の立場がわかる本でもあります。そして、イギリス滞在とおそらくフェビアン協会のメンバーとの実際の交流が、この後みるベルンシュタインの修正主義論争の一つの契機になったといわれています。

^{*4} 第一巻のかぎりでマルクスがラッサールに直接論及しているのは註(1)と(65)の2箇所、^{Plagiarism} 剽窃や用語ミスについての註で、表面上は無視する感じです。

参加し、賃金をうけると同時に年末に企業のあげた全余剰をボーナスとして分配する、いわば労働者が同時に資本家になる方式です。こうしたことを成し遂げるには、普通選挙を通じて議会をコントロールし制度改革を一挙に進める必要を考えたわけです。その意味で、分散型の組合をベースに漸進的改良を進める、イギリスの協同組合論者と異なるビジョンをもっていたといつてよいでしょう。

■ドイツ修正主義論争 ドイツ修正主義論争は、このラッサール派とマルクス派（アイゼナハ派）との対立を下地にしています。もちろん、バルンシュタイン（1850年 - 1932年）とカウツキー（1854年 - 1938年）の修正主義論争自身は、もっと後の時代のマルクス派の内部の論争です。^{*5}ただ、この論争はあとから独自に脚色された観があります。後で述べる宇野弘蔵をふくめ、ドイツ留学を経験した日本のマルクス経済学者によって、この論争は独自に「読まれた」節があり、その影響が戦後に一定の影響を与えたのです。いまの時点でふり返ってみると、この論争当事者の間には、言われるほど決定的な溝が見受けられません。この論争は、修正主義か正統派かといわれてきたのですが、マルクスがラッサールに対して明示しなかった「空欄」を埋めることで、マルクス主義は独自の革命主義を基調にしてゆきます。『資本論』に埋め込まれていた資本主義的発展の理論をマルクス没後の現実に結びつけることで、資本の集中と資本賃労働の両極分解と対立の激化、こうしたことからドイツにおける社会主義革命が主要課題とされるわけです。

ただこの論争をいま外からながめてみると、それはラッサール主義の独自の「議会主義」の評価に根ざしていたようにみえます。そしてこうみると、ラッサール主義に回帰したバルンシュタインと論争することで、両極分解論や内部崩壊論、唯物史観をコアとする「マルクス主義」が、カウツキーによって明示的に掘りおこされていったというのが実情だということになります。この発掘作業は、オースト・ロマルキシズムにつながり、「20世紀のマルクス主義」形成の一契機となったのです。Marxismus という用語が内容を伴ってどのように成立普及したのか、— こうした興味も理論家（の端くれ）として禁忌してきたのですが — エンゲルスが一つの源泉かもしれません。この論争でブレイクしたのではないかと思います。ヒルファディング（1877年 - 1941年）の『金融資本論』（1910）や、ローザ・ルクセンブルグ（1871年 - 1919年）の『資本蓄積論』（1913）も、資本蓄積のゆきつく先に対する関心から出発し、帝国主義段階の新たな現実に迫る試みだったのであり、そのなかで商品からはじまる『資本論』体系全体に対する理解も急速に深められていったのです。こうして、1910年代から20年代にかけて、『資本論』が新たなレベルで本格的に研究されるようになり、これが日本のアカデミックな「マルクス主義経済学」の研究水準を規定することになったわけで、私もそのおコボレにあずかってきました。こうした理論水準からみると、『資本論』の「解釈」としてはどうもバルンシュタインのほうが

^{*5}Bernstein, Eduard, *Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie*. J. H. W. Dietz, Stuttgart 1899. 佐瀬昌盛訳でダイヤモンド社から『現代思想7』として1974年に訳本がでている。これ以前には戸原四郎訳で『世界大思想全集; 社会・宗教・科学思想篇; 15』として河出書房新社から1960年に、さらに戦前の訳もあります。Kautsky, Karl, *Bernstein und das sozialdemokratische Programm, eine Antikritik*, 1889, この訳は未見です。

分が悪いのですが、それは主張内容が不適切だということを意味しません。いまの時点からふり返ると、『資本論』が残した空欄を「資本主義の崩壊」で埋め、「最終目標」としての「政治権力の獲得 → 生産の社会化」という「革命」のシナリオを描くより、ベルンシュタインのように、資本主義の適応能力を認め、「人々が一般に社会主義の最終目標 Endziel とよんでいるものは、私にとって無 Nicht であり、運動がすべてである」(佐瀬訳 247 頁) という不断の「改良」のほうがシックリくるイデオロギー状況のなかに暮らしているのはたしかなようです。

■マルクス＝レーニン主義 ベルンシュタインもカウツキーも、ともにロンドンのエンゲルスのところにいたことがあり、その意味でイギリス資本主義の変質と労働運動の現実を目の当たりに見てきたわけです。修正主義論争もある意味では『資本論』に描かれた19世紀の資本主義とは異なる現象が、論争の背景を形づくっていました。その点でたしかに論争は論争なのですが、両者は同じ現象を共有しており、外側からみると同じ「枠組」のうちに取まっていたようにみえます。決定的だったのは、この社会民主主義の共通の「枠組」そのものを突き崩す事態が発生したことです。第一次世界大戦がそれです。ベルンシュタインにせよ、カウツキーにせよ、修正主義論争の当事者は、この帝国主義戦争に対して有効な方針を提起できなかったのです。

「マルクス＝レーニン主義」については別に話したことなので詳しくは繰り返しません。帝国主義という段階認識が、20世紀のマルクス主義の画期となるのです。ベルンシュタイン [1899] は第4章「社会民主党の任務と可能性」のd「社会民主党の当面の任務」のなかで「防衛問題、対外政策、植民地問題」を論じるのですが、そのなかで「植民地の獲得にあたってはつねにその価値や見通しを厳密に検討し、現地民との示談や現地民の処遇、さらにその他の業務を厳格に統御しなくてはならぬいわれはあるにしても、しかし、植民地獲得を頭から非難すべきものとみなす理由は、見当たらないのである。」(222頁) と述べています。ホー・チ・ミン(1890年 - 1969年) も毛沢東(1893年 - 1976年) も、これではマルクス主義者になりたいとは思わなかったでしょう。そして、カウツキーもまた、第1次大戦における「祖国防衛」を唱える党内右派に対抗しきれず、若いレーニン(1870年 - 1924年) に『帝国主義論』(1917)で批判されたのです。20世紀のマルクス主義は、帝国主義に対抗する運動を核に「マルクス＝レーニン主義」として擡頭したのです。

■宇野弘蔵の『経済学方法論』 日本における「修正主義論争」は、この帝国主義論の枠組のなかで相対化されました。宇野弘蔵(1897年 - 1977年) は『経済学方法論』(1962)でこの論争を紹介していますが、その内容は要するに、ベルンシュタインもカウツキーも『資本論』を現実に直接適用しようとしたことに方法論的な無理があり、純粋な資本主義を想定した原理論をベースに資本主義の生成・発展・没落という発展段階論を構成し、この段階論を媒介に異なる諸国の現状分析をおこなう方法論的整備が必要だということです。たしかこの本には「日本資本主義論争」をとりあげた章や節はなかったと思いますが、日本におけるマルクス経済学を受容の過程で繰り返されたこの論争が当然「修正主義論

争」に重ねられ、『資本主義の最高の段階としての帝国主義』という書名に「段階」の認識を読みとろうとするのです。

「修正主義論争」のこのような評価を含め、宇野弘蔵の経済学は戦後日本の社会主義運動に影響を与えました。マルクスの場合と通じるところがありますが、必ずしも実践的に踏みこまないわけですが、新左翼の運動に対する影響は無視できません。このあたりの話は別にしなくてはなりませんが、いずれにせよ、戦後の日本においてマルクス主義がイデオロギー的な力を発揮した基盤が崩れたことはたしかです。こうした認識に立つてみると、戦後日本で紹介された「修正主義論争」が「マルクス＝レーニン主義」によってかなり脚色された「修正主義論争」論だったのであり、それは「修正主義論争」の重要な側面を隠蔽することになっていたことに気づきます。マルクス主義における広い意味での「革命」の問題です。「マルクス＝レーニン主義」は「修正主義論争」の当事者、そしてのちの欧米社会民主主義者が陰に陽に患っていた宿痾、広い意味での排外主義を乗り越えたのですが、「革命」に伴う権力集中という宿痾をより深刻なかたちで引き継ぐことになったのです。帝国主義と植民地支配、福祉国家の支配下での南北問題、こうした20世紀の現実のもとで、「革命」を標榜する「マルクス＝レーニン主義」は、どんなに負の側面を伴ったとしても、その歴史的役割を果たしました。しかし、この歴史的プレートが大きく転換した現代において、同じ枠組で「修正主義論争」をふり返るのでは不十分です。そこに浮かびあがってくるのは「革命なき社会主義」としての社会民主主義です。いま社会主義とはなにか、どのような社会主義が可能なのか、と問われれば、革命のための手段としての「民主主義」ではなく、絶えず権威を解体し、権力を下方に分散させる継続的運動、福祉国家の枠に糾合され国民国家に分断される社会民主主義に対抗する急進的社会民主主義がそれだ、と私は答えます。